

「ヘリコバクター・ピロリフォーラム」 病態と治療の最前線

藤岡 利生・榎 信廣 編集

帝京大学医学部第3内科

中 村 孝 司

竹本忠良教授による本書の「序として」によれば、本書は、1995年から毎年2回開催され、今年で10回目になる「ヘリコバクター・ピロリフォーラム」という、若年研究者による研究会の5年間の結晶がまとめられたものであるという。中高年のいわゆる斯界の権威者を全く含まない、若年研究者だけで作りあげた、活力のあふれる論文が多数並んでいる。

単に自分のデータのみを挙げて結論を主張する原著形式の論文でなく、これまでの多くの成果を十分咀嚼して、総説として書かれているので、*Helicobacter pylori* (*H.pylori*) をとりまく諸問題の現況を理解するのに大いに役立つであろう。

では内容を見てみよう。全体は大きく3部に分かれており、1冊約200頁のうち、第1部「病態」では約

70頁が割かれ、*H.pylori* とその病態に関与すると考えられている種々の要因(接着因子、サイトトキシン、サイトカイン、NO、アポトーシス、白血球、リンパ球、菌株の多様性、宿主因子、酸分泌の10項目)がまとめられている。*H.pylori* の基礎的な分野であり、最近では若手研究者が多数この分野に精力的に取り組んでおり、立ち遅れたわが国の *H.pylori* 研究も、世界のレベルに到達してきたことを示す領域である。まだ未解決の問題が山積しており、やりがいのある分野である。

第2部は実験動物による感染実験や発癌を取り扱った部分であり、4篇で約30頁がこれに充てられている。*H.pylori* による発癌は極めて大きな問題であり、動物実験によるわが国での成果は世界を抜いており、論文からもいきいきとした活力

が伝わってくる。特に読みごたえのあるところであろう。

第3部は治療篇であり、本書の半分がこれに振り向けられている。12篇の論文から成っており、*H.pylori* 除菌治療の基本から、除菌の対象、具体的な除菌の方法とその評価が詳しく述べられており、*H.pylori* 除菌治療が保険医療として認められようとしている現在、これから除菌治療を始める人たちの参考書として実地に役立つ部分である。

このように、この1冊で *H.pylori* に関する現在の知識のレベルが十分理解できる手頃な読みやすい書であると考ええる。

● B5 頁208 図105 写真17
カラー写真29 表68 1999 定価
(本体4,700円+税) ㊦400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)